

Yamato Welfare Foundation
ヤマト福祉財団

ヤマトグループ賛助会員向け
ニュース(季刊)
発行部数13万部・非売品

2017.7.20 Summer

No.
55

NEWS



平成29年度福祉助成金事業～助成金贈呈式

**私たちにできること、
私たちができること。**



はたらき



Profile

1938年4月6日生まれ、1962年3月、広島女学院大学英文科卒業。同年、横浜市立中村小学校訪問学級指導講師。1983年、障害者地域作業所「朋」指導員。1986年、知的障害者通所更正施設「朋」施設長。2000年、社会福祉法人訪問の家理事長。2003年、横浜市教育委員会委員。2005年社会福祉法人十愛療育会理事長。2012年、株式会社福祉新聞社取締役。2014年社会福祉法人横浜市栄区社会福祉協議会会長。同年、劇団文化座理事。2017年、社会福祉法人訪問の家顧問。第2回ヤマト福祉財団賞受賞者(2001年)

日本で初めて出来た重症心身障害児(者)の通所施設、社会福祉法人訪問の家「朋」は昨年30周年を迎えた。その初代の施設長を務め、理事長を6年間務めた年月を振り返ると、なんと多くの心を動かされる出来事、場面に会ってきたことかと、改めて思う。

開所して間もなく、近くの小学校から七夕集會に招待をされた。みんなは車椅子に乗り、職員が、日傘で影を作りながら小学生の皆さんと輪踊りを楽しむという体験をした。4年目だったと思う。それまで職員がしていた挨拶を、脳性まひで緊張は強いが「ア」と声のでる、たかのりさんをお願いした。校庭で全校児童を前にしての挨拶。果たして彼が上手に声を出せるか、心配している私たちの前で彼は一生懸命「あーあ」と声を出し、見事に大役を果たした。

次の日、一人の女性教師から私に手紙が届き、そこにはこう書いてあった。「彼のアアという挨拶を子どもたちが一生懸命聞いていた。私たち教師が子どもたちに十分伝えられない(力)いっぱい生きること。チャレンジすること。それらを彼は見事に子どもたちに伝えてくれた。何かみなさんにやってあげている、と思っていたが、間違っていた。やってもらっているのは私たちだった。これからは子どもたちをどんどん朋に行かせたい。朋のお兄さん、お姉さん、子どもたちに一杯教えてやってください」

以来、小学校の子どもたちは気兼ねなく遊びにやってくる。そして、3年生、4年生は毎年朋のみんなとの交流プログラムを楽しんでいる。

たかのりさんは、身体を使って報酬を得るといふ働きはできない。しかし小学校のみんなと朋とを結ぶ大きな「はたらき」をしてくれた。

人間は皆関係の中で生きている。どんなに障害が重くても、人は関係の中で大きな「はたらき」をすることができる。彼はまた私たち職員にも、みんなの「はたらき」の場を地域の中でつくるのが、みんなが地域で生きる大きな意味だと伝えてくれたのだった。今もはっきりと、小学校校庭でのあの場面が目の中に残っている。

CONTENTS

表紙写真

ジャンプアップ助成金を贈呈した「陽なたぼっこ」(熊本県小国町)のお弁当配達にヤマト運輸熊本主管支店の熊澤宏主管支店長(右)と労働組合の渡邊猛支部執行委員長が同行しました

03 平成29年度福祉助成金事業～助成金贈呈式
私たちにできること、
私たちができること。

04 ジャンプアップ助成金贈呈式・特別座談会
誰もが誰かを助けている。
～地域コミュニティを支えるのは障がい者

08 助成先レポートVol.30
認定NPO法人 つくばアグリチャレンジ ごきげんファーム(茨城県つくば市)
若い視点で「農業×障がい」にゼロから挑む

10 奨学生レポートvol.11
知名度の低さ、資金不足、競技レベルの足踏み…。
障がい者スポーツの悪循環を断ち切りたい!

12 この街で、一緒に生きていく。障がい者のクロネコDM便配達事業
自分のペースで黙々と。任されているから、やり遂げられる。



日本障害フォーラムが
推進するイエローリボン
運動に賛同しています。



私たちにできること、
私たちができること。



障がいのある方々の経済的自立を理念とする当財団では、いくつかの助成金事業に取り組んでいます。
給料増額のための新規事業立ち上げや整備計画を応援するほか、夢を叶えるために大学へと進学した障がい学生を支援しています。
今年度の助成決定団体をお知らせするとともに、皆さまの助け合いの気持ちが届いた一コマをご紹介します。



誰もが誰かを助けている。 地域コミュニティを支えるのは障がい者

「就労支援センター陽なたぼっこ」は、熊本県北東部の山あいの町・小国町で唯一の障がい者施設です。去る4月27日、ヤマト運輸(株)熊本主管支店長、労組熊本支部執行委員長も同席し、助成金の贈呈式が行われました。「陽なたぼっこ」がこの資金で計画するのは「調理場の増築」。しかし、それは一施設に留まらず、小国町全体にとっても意味を持つものでした。



陽なたぼっこの小国町にお伺いして行われた29年度ジャンプアップ助成金の贈呈式

高齢者の暮らしを支える作業所

「陽なたぼっこ」がA型事業所を発足させたきっかけには、こちら小国町の置かれている現状が深く関係しているそうですか？

奴留湯：ええ。ここ小国町と南小国町を合わせて小国郷と言うんですが、かつては林業で栄えた山間地域です。しかし現在、小国町の人口は7400人ほど、少子高齢化が著しく、人口の減少に歯止めがかりません。65歳以上の高齢者は町民の37%をすでに超えています。

そのおわりを受けて、地域に根ざした地場産業や小規模店舗のほとんどが廃業を余儀なくされました。健常者でも働く場が足りない状況です。障がい者はなおのこと、地域の中で居場所を失っていました。また、近くに店舗や弁当屋がなくなった結果、高齢者の多くが買い物弱者になりました。

——この2つを解決するために、高齢者向け配食サービスを行うA型事業所を立ち上げられたのが2014年ですね。

奴留湯：そうです。行政も配食サービスに取り組んでいましたが予算が逼迫していたこと

から、1食につき自己負担2000円・町の負担4500円の弁当を、当時は30食×週2回しか配っていませんでした。

それでぜひ、仕事をしたい障がい者と一緒に弁当事業を始めようと考えました。障がい者には給料を、高齢者にとっては栄養面の支えとなることができるからです。当初は1日約70食からスタートした試みも、今では270食にもなりました。ただ、200食を超えると現調理場はたいへん手狭で拡張せざるを得ない。それで棟野施設長がヤマト福祉財団さんに助成を申し込みました。

熊澤：皆いきいきと工夫されて仕事をされている様子を調理場で拝見しましたが、やはり200食を超えて作業するにはちょっと狭いですよね。しかも、まだまだ配食希望が増しているという話です。

渡邊：手作りのおかずが並んだ弁当が本当に美味しそうで、製造に機械化の進んだ大手の弁当とちがって心がこもっている。受注が伸びるのうなずけます。

熊澤：配達にも同行させていただきましたが、配達先の方が笑顔で受け取って「いつも一人なんで…」と漏らした言葉が印象的でした。地

座談会 出席者

- ・小国町社会福祉協議会 会長 奴留湯 哲宣
- ・小国町社会福祉協議会 事務局長 佐藤 旨人
- ・小国町社会福祉協議会 統括施設長 棟野 正信
- ・小国町社会福祉協議会 就労支援センター陽なたぼっこ サービス管理責任者 坂田 英之
- ・ヤマト運輸(株)熊本主管支店 主管支店長 熊澤 宏
- ・ヤマト運輸労働組合熊本支部 支部執行委員長 渡邊 猛



左から労働組合熊本支部・渡邊猛支部執行委員長、熊本主管支店・熊澤宏主管支店長、小国町社会福祉協議会・奴留湯哲吉会長、同・佐藤盲人事務局長、同・椋野正信統括施設長、陽なたぼっこ・坂田英之サービス管理責任者

域に密着した「陽なたぼっこ」の活動に、お客様の意思も一緒に運ぶ精神でやっている我々の仕事にも共通するものを感じ、うれしく思いましたし、我々も見習わなきゃいけないところが多々あるなど。

渡邊：地域の方が元気かどうか、見守りの役割も担っていらっしゃる。私たちのカンパを、ぜひ助成金という形で活用していただきたいと思いました。

20年先のモデルを見据えて

——立ち上げからこの3年間でどのような苦勞がありましたか？

椋野：とにかくノウハウが皆無の状態でした。現場はかなり混乱したと思います。あるのは障がい者の働く場を作りたい、一人暮らしの高齢者の栄養管理に寄り合いという理念だけ。どのくらいの受注があるのかもまったく見えていませんでしたから。

坂田：料理するのも初めてでしたし、食材を

注文、確保する方法も分かりませんでした。地元の野菜を使うことをコンセプトに掲げていたんですけど、何割まで地元野菜にするか。まず僕は悩みました。どこかの八百屋さん頼むと、地元野菜じゃなくなってしまう。かといって地元だけでは最初はなかなか量も揃わない。今は直売所に相談に乗ってもらって調整できるようになりました。

認知症の方とのやりとりも大丈夫かなと思っただけで、何か問題が発生したら今はケアマネージャーさんに間に入ってもらう形で、見守りをやっています。

熊澤：我々としても、日本全国一般の公道を使って仕事をさせていただいていることを肝に銘じて、各地の行政と連携して見守りのお手伝いをさせていただいております。そこにあるのは商売云々という以前に、宅急便が41年前に始まってこれまでもずっと地域に育てていただいた。その恩返しという上から目線で嫌なんですけど、地域になくしてはならない存在、愛される企業を目指していきたいという思いです。

渡邊：「夏のカンパ」も去年で30年となりました。労組が中心となって社員のみなさんから、交通遺児の支援を謳ってカンパを募ったのが始まりです。これまでの総額は約13億6000万円。毎年7000万円以上の善意が集まり、あしなが育英会とヤマト福祉財団に定期大会の場で寄付してきました。こうしたカンパや賛助会費が助成の財源となっており、ぜひ「陽なたぼっこ」さんのような方々のところで、ヤマトグループ17万人の善意を有効に生かしていただければと思います。

佐藤：調理場の拡張によって、当面の目標は1日300食の配食。そして障がい者雇用を15人まで増やし、給料も1万5000円ほど増やしたいと考えています。そして、社会で働く場所が欲しい、給料がもう少し欲しいという立場を超えて、逆に地域をサポートする側に障がい者が立つこの仕組みは、日本社会の20年先のモデルとなり得るはず——。そう信じて邁進していきたいと思っています。



届けるのはお弁当とコミュニケーション。見守りの役割も果たしている配達に同行した熊澤主管支店長と渡邊支部執行委員長

就労支援センター 陽なたぼっこ

就労継続A・B型・就労移行

調理場施設の拡張増築資金

- 平成27年度平均給料 55,787円(13人)
- 平成30年度目標給料 66,944円(15人)

顕在化した地域のニーズにいかに応えるか

2014年よりA型事業を開始。全くの未経験ながら高齢者向け配食サービスに挑戦しています。3年で200食を目標にしていたが、1年半で達成。むしろ弁当の受注を制限している状態です。しかしニーズに応えるには手狭になった調理場の拡張が課題でした。就労希望の障がい者を一人でも多く受け入れ、お弁当が届くのを首を長くして待っている高齢者のためにも、資金の助成を待望していました。



平成29年度 ジャンプアップ助成金決定施設

陽なたぼっこ(前ページで紹介)を除く6施設

ひかり工房

就労継続A・B型・就労移行

石窯オープン、コンバクションオープンの購入

- 平成27年度平均給料 79,570円(33人)
- 平成30年度目標給料 83,333円(38人)

お客様を飽きさせない商品開発に



主に精神障がい者の所得と雇用の向上を掲げ、2003年よりパンの製造販売で成果を上げてきました。2014年度にはA型事業を開始。定員も15名まで増員できました。しかし2016年度は初の前年度割れの見通しに。そこでオープンの使い分けでパンの付加価値をいっそう高め、復調とさらなる飛躍を図る計画です。

カシスのしずく

就労継続B型

ニンニク用植付機・仕上機・乾燥機・茎切機等の購入

- 平成27年度平均給料 28,412円(20人)
- 平成30年度目標給料 33,333円(20人)

機械化で品質の安定と利用者の負担軽減



当初は果樹栽培を事業の柱に据えていたものの、ニンニク生産量日本一である十和田市の土壌を再認識し、2014年からニンニク栽培に主軸を転換。0.4haから作付面積を順次拡大し、2017年度には2.0haまで広がります。これにともない手作業に頼る従来の方法は限界と判断。機械化に踏み切り、課題であった品質の安定も狙います。

早月農園

就労継続B型

運搬用モノレールの修復とジャム製造機の購入

- 平成27年度平均給料 22,558円(16人)
- 平成30年度目標給料 47,500円(20人)

賃金倍増計画の遂行に欠かせぬ機械化



和歌山県有田川町の間部で耕作放棄地を有効活用して農園を営んでいます。売上の大半を柑橘類が占め、高品質化と園地拡大を計画中ですが、前所有者のモノレール劣化が課題。運搬機なしでは収穫のままならず、劣化した状態での運用は事故にもつながりかねません。また、規格外品もジャムに加工することで付加価値が期待できます。

合同会社 農場たつか一む

就労継続A・B型・就労移行

養鶏場のハウス鶏舎整備資金

- 平成27年度平均給料 97,786円(13人)
- 平成30年度目標給料 101,293円(17人)

1000羽増やして生産能力30%アップ



北海道の壮瞥町で自然養鶏を営む同社。加工やカフェ運営など6次産業化を進めつつ、A型で月給約10万円を達成しています。平飼い有精卵の需要は依然高く、新型の鶏舎を2棟増設することで、飼育数・生産能力を増強。また生産性の低い老朽鶏舎の置き換えを促進することで、給料アップに直結する利益率の向上が期待できます。

ぶなの木学園 共働社

就労継続B型

食品加工用の低温減圧乾燥機の購入

- 平成27年度平均給料 24,738円(16人)
- 平成30年度目標給料 39,833円(20人)

商機と見極めて乾燥機を2台体制に



農生産や食品加工などで「年金+給料で10万円の生活費を稼ぐ」を目指す共働社の看板商品は「郡上の干し芋」。減圧平衡発熱乾燥機で仕上げた、しっとりとした風味が人気です。しかし乾燥機はたった1台ゆえ、確保した約8tのイモを乾燥するにも作業の遅れが問題に。給料増額と農福連携の強化に、もう一台購入で弾みをつけます。

ストーク作業所

就労継続A・B型

トマト用ハウス増設(1棟)とケチャップ加工機材の購入

- 平成27年度平均給料 26,435円(17人)
- 平成30年度目標給料 27,389円(18人)

好評だったケチャップに白羽の矢



野菜の生産販売と豆腐やジャムなど加工食品の製造を行ってきました。しかし、これ以上の事業収益が見込めないことから、従来わずかしか生産していなかった「樹熟^{じゆじゆく}トマトのケチャップ」の本格生産に乗り出すことにしました。増産に必要なハウスと灌水設備、加工用のフードカッターなどを揃え、2018年からの製造を予定しています。

平成29年度

給料増額支援助成金
障がい者福祉助成金

全国で助成金の
贈呈式を行いました。

北海道支社



東北支社



関東支社



東京支社



中部支社



関西支社



中国支社



四国支社



九州支社



若い視点で「農業×障がい」にゼロから挑む

都心のベッドタウン化も進む筑波研究学園都市ですが、その足元には遊休農地も目に留まります。「ごきげんファーム」はこの地で6.2haの農場と1haの体験農園を展開。近隣の個人客を対象とした「野菜セット」(1,500円)の契約販売事業で、月200万円を売り上げています。

Data

認定NPO法人 つくばアグリチャレンジ
ごきげんファーム
茨城県つくば市



一念発起し、社会起業！

「ごきげんファームは6年前、つくば市に発足したNPO法人が運営する農場です。野菜の栽培・販売を中心とした事業に、45名以上の障がい者が従事しています。〈夏場の作業効率アップと冬場でも栽培できる環境〉を実現するために、当財団の助成を得てビニールハウス3棟、小型トラクター、1tトラックを整備しました。

「現在は品目で言うと50種くらい。でもネギだけでも8種類くらい作っているので、敵密な品数だと、すこし前に数えたときには128でした。この中から旬の野菜を7〜8つほどまとめ、『野菜セット』という形で定期的に近隣450世帯に配送する契約販売をしています」と語るのは、NPO法人の副代表理事で農場長を兼務する伊藤文弥さん。28歳の若き、ファームのリーダーです。

伊藤さんがこの世界に飛び込んだきっかけは大学2年生のとき。筑波大学で化学を専攻していたものの、化学より政治に関心があったという伊藤さんは、たまたま地元市議のインターンシッ

プに参加。期間はたったの2カ月でしたが、市議の手伝いで〈農業と障がい者〉のテーマを調べることに。障がい者の置かれている現状が分かるにつれ、「他人事ではない」と思うとともに、障がい者の給料の低さに衝撃を受けました。

農業成功、商売失敗

「障がい者は働く場がない。片や地元の農業は深刻な担い手不足。だったら、この2つをいっしょにすればハッピーになれるんじゃないか？」翌年から準備を始め、大学4年生のときには市議とともにNPO法人を設立。卒業と同時に事業をスタートさせました。

しかし、つまずきは早かったと言います。

1・2haの農地で最初に作ったのはホウレンソウ。化学肥料を使用する慣行農法で、「完全なるビギナーズトラックですけど、すこくおいしかったんですよ。でも売れなかった」ホウレンソウは競合が多すぎたと判断し「つぎにチコリとかバターナッツといった珍しい野菜を作ることにしました」直売会では誰もが興味を示すものの、調理の仕方も分からない新顔野菜はやはり売れません。そ



旬の朝採り野菜を定期的に宅配する野菜セットのチラシ。

①助成で整備したトラクターでマルチを貼るのは利用者の益子さん ②選果場で「野菜セット」の袋詰め。ファームでは1年間を通して、野菜が途切れることのないよう多品種を並行栽培している ③スナップエンドウは収穫の季節 ④農場長の伊藤文弥さん ⑤この日の作業の一つは、サトイモ畑の草取り ⑥助成で整備したビニールハウス、トラック、トラクターの前で全員集合

労働組合支部執行委員長 助成先訪問 Series 25

ヤマト運輸労働組合
茨城支部執行委員長
松本 三智夫 さん



働く人全員が「ごきげん」で いられるように。

私たち労働組合は、障がい者の自立と社会参加の支援、交通遺児の支援を目的に、毎年「夏のカンパ」に取り組んでいますが、ごきげんファームさんのような有意義な使われ方を拝見して、今年も頑張らねばと改めて感じました。

茨城主管内でも障害者手帳をお持ちの方が34名いらっしゃいますし、ポスト投函を引き受けて下さる障がい者施設の方もいます。みなさん、仕事熱心で挨拶もしっかりされる頑張り屋の方々です。仕事に対する情熱や喜びは同じだと思いますので、病気や怪我のないよう、励んでいただきたいと思っています。



ここでとりついたのが契約栽培の受託です。
「プロに頼って、疲弊から成長へ」
「それでやっつと売れるようになったんですけど、そこから一番の暗黒時代になりました。仕事が追いつかず、社員は夜中まで作業に追われ、バタバタと辞めていきました。」
障がい者の活躍が第一だったはずなのに、「売らなきゃいけない」に縛られすぎ、組織は疲弊の一途をたどったのです。それで4年前、「設立当初の原点に立ち返り、農業を通じて地域と障がい者の壁を取り除きたい。そのためには、地域のお客さんと直接つながることのできる今の少量多品目の有機栽培をやる」ということになった「ごきげん」。

品目が増えれば、これまでの自己流にも限界が生まれます。改めて実績のある農家と契約し、2年かけて実践的なノウハウを学びました。その効果は絶大で途端に作業のムダが減り、収穫も安定するようになりました。「本屋に並ぶ指南書は家庭菜園向けがほとんどです。プロの教えは大事だと痛感しました」ソーシャルベンチャーを支援するNPOなどにも積極的に助けを求め、農業以外にも販売促進や顧客管理システムといった面の見直しを着実に進めました。その甲斐あって、いまでは月850セットを売り上げ、フルタイムで働くB型利用者は月平均約35000円の給料を得ています。
「10000セットを達成したら、みんなでディズニールンドに行く約束をしています。僕はもう今年中に行く決めてますけど。」
「ごきげんな笑顔が弾けるその日は目前です。」



私たちの賛助会費が活かされています 奨学生レポート vol.11

ささやかな夢、大きな夢。
夢を夢で終わらせないために、
大学に進み、将来の飛躍を誓う
奨学生がいます。
彼ら彼女らの前向きな日々を
ご紹介します。



池田ブライアン雅貴さん

慶應義塾大学
総合政策学部2年

1歳半のころ、先天性の感音性難聴と診断され、4歳のころに重症化するも幼少期を除いて普通学校で学んだ。陸上400mでは高校2年のときに日本ユース出場の標準記録をクリア。世界ろうジュニア記録と日本ろう記録を更新するタイムを残す。2016年にブルガリアで開催された世界ろう者陸上選手権大会マイルリレー(4×400mリレー)で銀メダル(日本新記録)を獲得。

障がい者奨学金制度

卒業後に社会の役に立ちたいと、障がいを乗り越えて多くを学ぼうとする大学生の方に月額5万円(返済不要)を助成しています。

知名度の低さ、資金不足、競技レベルの足踏み…。 障がい者スポーツの悪循環を断ち切りたい!

世界のステージにいざ出陣!

本誌がちょうどみなさんの目に触れるころ、池田ブライアン雅貴さんは、アスリートとして障がい者スポーツの祭典に出場。日本代表の一人として世界に挑みます。

いや、パラリンピックにはまだ早いよ、そういぶかしがる方も多いかも知れません。池田さんが出場するのは、デフリンピック2017。4年に一度開催される夏季大会が今年、黒海沿岸のトルコの都市・サムスンで開かれます。

障がい者のための世界的な総合スポーツ競技会はパラリンピックだけではありません。身体障がい者を対象としたパラリンピック。知的発達障がいの選手が競うスペシャルオリンピックックス。そしてデフリンピックは聴覚障がい者のための大会です。パラリンピックよりもずっと長い歴史を持っています。

総勢177名の日本選手団の一員として池田さんが出場するのは、400mリレー走。走者4人がバトンをつなぐトラック種目です。

週5日は練習をしているという慶應義塾大学・日吉キャンパスの陸上競技施設を訪れ、パソコンの画面にテキストを打ち合ってお話を伺いました。

もっと知ってほしい、僕たちを

「陸上競技を始めたのは小学3年生のとき。母の勧めでした。ハーフで耳が悪いことが原因で、学校でいじめに遭うのではと心配していました。それで、何かひとつ得意なものがあればと考えたようです」。

先天性の感音性難聴に端を発し、幼少期に重度の聴覚障がいとなった池田さんにとって、運動は大の苦手。健常者との意思疎通に追われてスポーツに目を向ける余裕もなく、体育



課題の資料を探す(湘南藤沢メディアセンター)



ウエイトトレーニングのメニューも豊富。筋力アップにかかせない



授業の合間の一息。湘南藤沢キャンパスのガリバー池(通称:鴨池)は学生達の憩いの場



湘南藤沢キャンパスで講義を終えたら、日吉キャンパスに移動し競走部の練習が始まる。週5日、朝練も含めて毎日3~4時間の練習。写真は、競走部のメンバーとトラックでアップの様子

に少ないことも分かってきました。

「障がい者の置かれている環境をもっと社会に理解してもらいたい。でも問題の根は一つではなく、さまざまな要素が絡み合った結果です。そこで、一つの領域にこだわらず様々な視点から学習し研究したい気持ちが強くなりました」。

体育教諭とは異なる夢を描き始めた池田さんは、すっぱりと大学を中退し、新たに自分が学ぶにふさわしい場として慶應義塾大学の総合政策学部を志望。AO入試出願までの期間も短く、苦勞は相当のものだったようですが、「準備を重ねるうちに漠然としていた将来のビジョンが、明確なものに変わったのでとてもよかったです」といいます。「見事、秋には合格を果たし翌年4月に入学。同大の競走部にも所属し、部の合宿所で学生生活を送っています」。

全力疾走。それは成長の糧

現在は、法律や憲法、行政、日本内外の経済や政治政策について勉強しているという池田さん。「グループで解決策を練り、プレゼンする形式の(社会保障政策)の講義は特に興味深い」と、勉学にも熱が入ります。

いずれは文部科学省に入省し、行政の立場から、聴覚障がい者の置かれている環境の改善に関わっていきたい、――。

そんなビジョンを実現するために社会関係を中心に学びつつ、障がい者スポーツに関する研究会(ゼミ)にも参加する多忙な日々。競走部の練習もハードですが、「合宿所の生活は、みんなで助け合って、楽しいです」と画面に打つてくれました。

トルコのトラックを全力で駆け抜け、そのままの勢いで夢のバトンを未来につなげてほしい。池田さんにエールを送ります。

の時間も先生の指示が聞き取れず消極的だったといえます。

しかし、恩師とも言える顧問の先生と中学に上がって出会うと一転、「陸上が好きになりました。選手としての才能も一気に開花し、全国大会で3位となるまでに。高校ではインターハイに3年連続出場し、高校2年のときには400mで48秒04を記録。全国同学年の個人ランキング7位に食い込み、高校1年から

は聴覚障がい者の陸上競技会にも参加するようになりました。

「そこで聴覚障がい者アスリートと接しているうちに『記録や良い成績を残しても知名度が低いから、なかなか注目されず悔しい』という声を聞き、十分ではない環境の実態を知りました」。

彼自身、高校時代にデフリンピックの日本代表に選出されたものの、環境が整わず、出場を

果たせなかつた苦い経験を持っています。目をそらさず、中退を決断

2015年、彼は体育の教諭を目指し、晴れて東京の大学に進学しました。しかし、次第に自分が本当にするべきこと、そのために学ぶべきことはなにかと、あらためて見つめなおすようになり、同時に障がい者スポーツや障がい者アスリートを専門とする研究者があまり

この街で、
一緒に生きていく。



公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコDM便配達事業

自分のペースで黙々と。 任されているから、やり遂げられる。

北海道の南東部に位置する釧路市。JR北海道根室本線の大楽毛(おたのしけ)駅から徒歩3分の住宅街に、就労継続支援B型事業所「オフィスきらり」があります。クロネコDM便は、毎日平均約100冊。3人のメイトさんが元気に配達しています。

釧路市大楽毛

釧路市の西側にある大楽毛はおたのしけと読み、アイヌ語で「オタ・ノシケ(砂浜の中央)」に由来しています。阿寒川の河口付近に位置し、釧路湿原国立公園の玄関口にもなっています。

「オフィスきらり」がクロネコメール便(後にクロネコDM便)配達をスタートしたのは2005年7月。小さなエリアから少しずつ広げて、今では大楽毛の町のほぼ全域を担当しています。

春夏秋は自転車 冬は車で配達

メイトさんたちは1年の内、春から秋を自転車で配達します。施設周りのエリアを担当する長谷川博康さんと佐藤仁司さんは、三輪自転車で。施設から遠く離れたエリアを担当する竹中晴美さんは、電動自転車です。しかし冬季になると、釧路は厳しい寒さに襲われるため、凍結と降雪で、自転車での配達はとても大変になります。そこで冬の間は有償運送許可

右/長谷川博康さんはすべてのDM便の住所別の仕分けを行います。その後、自分が担当するDM便を配達順にすばやく重ねていきます。



左/地図に配達先をマークする竹中晴美さん。毎日色の違うマーカーを使って描き込み、数日で地図を新しくしていきます。



●ヤマト運輸道東主管支店 釧路西センター

面積41.69km²/人口37,787人/世帯数20,284世帯

●特定非営利活動法人きらり 就労継続支援B型事業所 オフィスきらり

2005年7月からDM便配達を開始。1日平均配達冊数、約100冊。他には清掃、草刈り、雪かき、リサイクル品回収など。

「障がい者のクロネコDM便配達事業」

参入施設数 315施設 従事者数 1,608人(2017年5月現在)

お問い合わせは……(公財)ヤマト福祉財団 DM便担当

TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165

<http://www.yamato-fukushi.jp/>

※ 2015年4月1日より、クロネコメール便配達にはクロネコDM便配達へと変わりました。



「ありがとう、ごろうさま」と声をかけてもらい、うれしそうな竹中晴美さん(右)。

◀「三輪自転車はどんな強風でも倒れないから安心」と長谷川博康さん。



「ポストが小さくてDM便が入らない家があったので、いつもチャイムを鳴らして手渡していました。それが、ある日、大きなポストに付け替えてくれていて驚きました」とうれしい体験を語る長谷川博康さん。

フルマラソンの大会にも出場するスポーツマンの佐藤仁司さん。「不明な点があると必ず持ち帰って確認します」。



取材の日は関谷施設長(左)が同行し、配達ルートを手伝ってアドバイス。「新しいエリアの地図を覚えて、もっと早く配れるようになりたい」と竹中晴美さん(右)。

を受け、施設の車を配達に使用。運転のできる佐藤さんは車で配達し、竹中さんは施設長の関谷友子さんが運転する車で一緒に回ります。長谷川さんは、冬も三輪自転車で配達。雪の中で自転車を押したり引いたりしながら、時間をかけて配っています。

冬季の配達が訓練期間に

関谷施設長は話します。「竹中さんがメイトさんに参加したのはちょうど冬だったので、私と一緒に車で配達しました。4ヶ月間じっくり2人で取り組んだため、仕事をどんどん覚えていきました。4ヶ月目には、車の進行方向やUターンしにくい場所などを考慮しながら配達ルートを組めるまでに成長。春には1人での配達を任せられるようになっていました。今では新しいエリアも担当しています」。

雨や強風の日も黙々と

関谷施設長は、3人のメイトさんとはみなDM便配達に適任だと言います。「全員釧路生まれで、冬の寒さには強い。北海道の中で釧路の降雪量は比較的少ないけれど、凍結した日も、雨や強風の日も、誰一人イヤな顔をしません。この仕事への思いを支えているのは、一般の人と同じ仕事をしているという責任感と、ヤマト運輸の仕事をしているという誇りです」。

一人ひとりのペースで自分で考えてやりきる

長谷川さんと佐藤さんは12年前のスタート時から、竹中さんは6年前からのメイトさん。3人は施設に到着すると、すぐに担当エリアのDM便を配達順に並べ、地図に配達先をマークする仕事に取りかかります。全員、その作業は驚くほどスピーディ。まさにベテランの仕事ぶりです。

パートナーとしてなくてはならない存在

配達冊数の多い日の時間配分は自分で判断すること、体調によっては午後から配達してもいいなど、それぞれのペースで行うのが「オフィスきらり」のやり方。「責任を持ってしっかりとやってくれるので任せています」と関谷施設長は語ります。

ヤマト運輸道東主管支店 釧路西支店 野坂幸彦支店長は「国道を軸に、住宅地と工場の周りの遠隔地まできっちり配達してくれています。誤配やクレームもほぼない。調査票の記載の仕方もわかりやすくして正確。すべてに渡って信頼しています」と話します。

ヤマト運輸道東主管支店 サービスセンター 須田貴則センター長は「地域に溶け込んで、町のみなさんに愛されているのがわかります。これからもパートナーとして良い関係を保っていききたい」と語りました。



▶関谷友子施設長は話します。「体調が優れなくて、他の人が代わりにやらなければならない時のために、転居などの情報を書き込んだ地図はきちんと作ってもらっています。誰かがカバーしてくれるという安心感が、一人ひとりの頑張りを支えていると思います」。

◀前列向かって左から/「オフィスきらり」関谷友子施設長、長谷川博康さん、竹中晴美さん、後列向かって左から/ヤマト運輸道東主管支店 サービスセンター 須田貴則センター長、ヤマト運輸道東主管支店 釧路西支店 野坂幸彦支店長、ヤマト福祉財団北海道支部 千葉栄一事務長



責任を持ってやり遂げる、という目標を毎日着実にクリアしているメイトさんたち。もっと広いエリアでたくさんDM便を配達したいと、意欲満々です。「オフィスきらり」という名前のように、一人ひとりが生きがいを持って働く姿は、今日も「きらり」と輝いています。

自然栽培で農福連携に新たな広がり

自然栽培パーティ 第2回全国フォーラム開催 in郡山



「地域の問題も解決できる、価値ある仕事をしていこう」と佐伯康人代表

Program

5月19日 フォーラム・マルシェ

- ・開会挨拶
自然栽培パーティ 佐伯康人代表
ヤマト福祉財団 瀬戸 薫理事長
- ・記念講演
「自然栽培 農福連携が世界を変える」
木村秋則氏
- ・自然栽培パーティ活動報告と実践報告
※佐伯代表ほか

5月20日 フォーラム分科会

- ・「はじめての自然栽培」(NPO)縁活
- ・「自然栽培で楽しく働く」
(社福)無門福祉会
- ・「自然栽培の販売を通して広がるしあわせ」
(有)サンスマイル
※植樹祭も開催



自然栽培で育てた作物をマルシェで販売



「人を救う栽培、世を直す栽培、それが自然栽培」と木村秋則氏



「この活動が2倍3倍へと年々広がることを祈念しています」と瀬戸理事長



北海道から沖縄まで、全国の参加団体が自然栽培の成果を報告

自然栽培を利用者さんの手で 「日本と日本の農業をもっと元気に」

5月19・20日、福島県の郡山市民文化センターで、自然栽培パーティの全国フォーラムが開催されました。現在、自然栽培パーティの参加施設は、日本全国に広がり約60団体に。佐伯代表は「利用者さんが、無農薬・無肥料・無除草剤でお米をつくり、日本と日本の農業をもっと元気にしよう」と呼びかけています。

開会にあたり瀬戸理事長は「日本には富山県ほどの広さの耕作放棄地があります。利用者さんの手で再生し、安心安全な作物を提供してください」と挨拶しました。『奇跡のリンゴ』で有名な木村秋則氏は「2020東京オリンピック・パラリンピックで、自然栽培と農福連携により世界の人たちに日本の食の素晴らしさを伝えたい」と講演。続いて全国の参加団体が近況を報告しました。「近隣の保育園などの子供たちも参加している」「台風で他の田んぼの稲は倒れたが自然栽培の稲は大丈夫」「村中で無農薬のお米とお茶で玄米茶づくりをはじめている」などの声を届けました。佐伯代表も「耕作放棄地を再生する利用者さんは、いまや地域になくはない存在」と話しています。

翌日の分科会では、自然栽培を実践している二つの施設と流通を担う企業が、現状を具体的に伝えました。また、郡山市の福祉施設で植樹祭も開催。自然栽培と農福連携が全国各地で根づくようにと、木村氏とともにリンゴの苗木を植えました。

この第2回全国フォーラムの開催を、ヤマト福祉財団が支援しています。

5月20・21日 「第6回 熊田塾」

地域とのつながりを活かし
魅力的な商品や事業をつくり出す

第6回熊田塾は、塾長施設(社福)こころんで開催しました。熊田塾長は、地域の方と福祉施設の双方にメリットを生む方法を考え実践。「直売カフェこころや」の品揃えは、地元農家の旬の農産物や加工品などで充実しています。塾生たちは、お米やタマネギ以外の野菜の栽培、ミカンを使った加工品の開発、販売店のレイアウト改善案などを報告。また、全国農福連携推進協議会が、2020年東京オリンピック・パラリンピックで「障がい者の手による食材の提供」を支援すること、そこに自分たちがどう関わっていきけるかについても情報共有しました。



「こころや」には、地元農家が育てた農作物や企業と共同開発した加工品も



「地元と連携すれば新たな解決策も」と熊田塾長が各塾生にアドバイス

6月8・9日 「第5回 5万円必達塾」

何のため、だれのために売るのが
初心に立ち返り目標達成を目指す

着実に成果を上げ、目標まであと一歩と迫った5万円必達塾の塾生たち。第5回研修会は、武田塾長の施設(社福)はらから福祉会で開催し、いくつかの事業所を巡り、各所長から話も聞きました。すべてが順風と思われていた塾長施設でも、さまざまな苦労や失敗を乗り越え前に進んでいます。「利用者さんの自立のために、生産した商品をなんとかしても売り切り給料を支払う」と、商品が売れ残れば飛び込み販売もします。何のため、だれのために自分たちは頑張っているのか。塾生たちは初心に立ち返り、残り3ヵ月での目標達成を目指します。



「イベントも参加するだけではなく自ら企画し販売の機会を増やす」と施設長



徹底した衛生管理のもとで新商品を開発する「みおセヶ浜」の現場を見学

6月23・24日 「第6回 亀井塾」

課題がたくさんあるほど
解決できたときの喜びは大きい

第6回亀井塾は、山梨県でクラッシュゼリーなど果物の加工販売を行う塾生施設(NPO)かしのみで開催。新規事業のブドウ園も見学しました。「利用者さんの給料増額に失敗を恐れず挑戦したい」と施設長。亀井塾長は「トップが先陣を切って動く施設は伸びる」と評価しました。翌日は、目標に向けて着実に成果を上げている塾生が、クッキーや缶詰の生産設備の増強、新商品の開発計画などを発表。「より売上・利益を伸ばすには、収支計算をしっかりと行い、PDCAで全職員が数字を確認し、必ず達成する覚悟が必要」と亀井塾長が激励しました。



新規事業のブドウ園の収穫は、1/4をドライフルーツに加工する計画



夏場に売上が伸びるクラッシュゼリーを製造するかしのみNeoの利用者さんと職員

6月6日 「新堂塾(第3期)見学・勉強会」

自分の役割を知ると責任感が芽生え
仕事に向かう態度も変わってくる

新堂塾では、DMなどの封入封かんを事業の柱に考える塾生施設(社福)大阪聴覚障害者協会・あいらぶ工房を見学しました。「納品に同行してからは、みんなと働くことが苦手だった利用者さんが、他班の仕事も手伝うようになった」と塾生。「自分の仕事が、どう社会に関わっているかが見えてきたからでしょう。自分の役割を理解すると責任感が芽生え、仕事に向かう態度も変わります」とアドバイザーの菅野 敦教授。「働く力をどう育てるかは職員の仕事。それにはまず職員が、生産の基礎を身につけることです」と新堂塾長は伝えました。



「ただ人が並ぶのがライン化ではない。ムリ・ムダ・ムラのない流れを」と新堂塾長



「仕事に責任感を持つ人にしか“協力”する態度はとれない」と菅野教授

5月13日、俳人の花田春兆さんが他界されました。第三回ヤマト福祉財団賞贈呈式以来、全受賞者に贈る俳句を詠んでいただき、平成27年にはご自身も同特別賞を受賞。28年には受賞者に贈った俳句をまとめた句集「まほろば」を発刊されました。心よりご冥福をお祈りいたします。



ゴッホ展 巡りゆく日本の夢 札幌展



《花魁》(漢斎英泉による)
1887年 油彩・綿布 ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵
©Van Gogh Museum, Amsterdam
(Vincent van Gogh Foundation)



《寝室》
1888年 油彩・カンヴァス ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵
©Van Gogh Museum, Amsterdam
(Vincent van Gogh Foundation)



《雪景色》
1888年 油彩・カンヴァス 個人蔵



《タラスコンの乗合馬車》
1888年 油彩・カンヴァス ヘンリー&ローズ・パールマン財団蔵
(プリンストン大学美術館長期貸与)
©The Henry and Rose Pearlman Collection /
Art Resource, NY
札幌、東京の2会場のみ展示

DATA

- 開催期間 ▶ 2017年8月26日(土)～10月15日(日)
休館日 ▶ 月曜日(ただし、9/18、10/9を除く)、9/19(火)、10/10(火)
開催場所 ▶ 北海道立近代美術館
アクセス ▶ ■札幌市営地下鉄/東西線・西18丁目駅下車。4番出口から徒歩5分
■JR北海道バス、北海道中央バス/道立近代美術館バス停下車。徒歩1分
開館時間 ▶ 9:30～17:00(会期中の金曜日は19:30まで)
※入館は閉館の30分前まで
観覧料 ▶

	一般	大学生・高校生	中学生
当日	1,500円	800円	600円
前売・団体・リピーター割引	1,300円	600円	400円

※小学生以下無料(要保護者同伴)
※団体は10名以上
※リピーター割引料金は、道立美術館で開催された特別展の半券をご提示いただいた場合の料金(1枚につきお一人様1回限り有効。有効期限は半券に記載)

日本を愛したゴッホ

フィンセント・ファン・ゴッホ(1853～1890)はオランダで生まれ、20代前半に神学の道を志し、伝道も行いましたが、常軌を逸した活動により資格を停止されます。1880年には10代ごろの画廊での勤務経験が下地となって画家となる決心をしました。1886年にはパリに出て翌年画廊ビングの店で大量の浮世絵と出会ったことが日本や日本美術に魅了されるきっかけとなりました。1888年には南仏アルルに浮世絵の中の鮮やかな色彩世界の日本を夢見て移住。「黄色い家」でのゴーギャンとの共同生活が始まります。しかし彼の口論の末「耳切り事件」を起こし、ゴッホは翌年精神病療養所へ。1890年に死去します。アルルでの短い期間がゴッホにとって日本に在るような感覚を持つことができた最も幸福な時間と言えるかもしれません。

日本人に愛されたゴッホ

ゴッホの死後、日本では「白樺派」の小説家や画家たちによりゴッホの作品や生涯が熱心に紹介され、少なからぬ日本人がゴッホ終焉の地オーヴェールを訪れる契機を作りました。ゴッホを看取った医師ガジェの息子は作品の多くを保存しており、1914年にはその地を山本鼎と森田恒友の二人が訪れます。そして現存するガジェ家の芳名録への最初の署名は1922年に画家黒田重太郎によって記されました。この後も多くの日本人が同地を訪問し3冊の芳名録に240人あまりが記帳しています。これほど日本人に愛された画家も少ないでしょう。

今回は日本初公開を含め国内外のコレクションからゴッホの作品約40点と、同時代の画家の作品や浮世絵など50点あまりを展示し、ゴッホの実像を多角的に検証します。

本展の美術品取り扱いにヤマトロジスティクス株式会社は協力しています。

- 主催 ▶ 北海道立近代美術館、北海道新聞社、NHK札幌放送局、NHKプラネット北海道
後援 ▶ 外務省、オランダ王国大使館、北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌市教育委員会、北海道PTA連合会、北海道小学校長会、北海道中学校長会、北海道高等学校長協会、北海道私立中等高等学校協会、北海道私立専修学校各種学校連合会
特別協賛 ▶ 大和ハウス工業
協賛 ▶ 損保ジャパン日本興亜
協力 ▶ KLMオランダ航空、日本航空、ヤマト運輸
共同企画 ▶ ファン・ゴッホ美術館
問い合わせ先 ▶ TEL: 011-644-6882(北海道立近代美術館)
ホームページ: <http://www.gogh-japan.jp>
巡回情報 ▶ 東京会場(東京都美術館)
2017年10月24日(火)～2018年1月8日(月・祝)
京都会場(京都国立近代美術館)
2018年1月20日(土)～3月4日(日)

平成30年度福祉助成金募集

ヤマト福祉財団は、障がいのある方々の収入が増えれば豊かで幸せな人生の夢が実現すると信じ、福祉施設が「経済的自立力」を兼ね備えることが、障がい者の望む「夢の福祉」であると考えています。

福祉施設の方々へのお手伝いとして、「経済的自立力」向上のため新規事業の立上げや生産性向上に必要な設備や機器の購入を支援する助成、障がいのある方の福祉を推進する効果的な事業に対し助成を行っています。

応募期間

平成29年10月1日(日)から平成29年11月30日(木)まで

I. 障がい者給料増額支援助成金

- ジャンプアップ助成金 助成金額 1件あたり定額500万円
- ステップアップ助成金 助成金額 1件あたり上限200万円

II. 障がい者福祉助成金

助成総額 1000万円(1件あたり上限100万円)

問い合わせ先

公益財団法人ヤマト福祉財団 助成金事務局 TEL: 03-3248-0691

募集内容・応募要件等詳しくはホームページをご覧ください。 <https://www.yamato-fukushi.jp/>



助成事業

公益財団法人
ヤマト福祉財団



読みやすさを追求した書体

